

経済と医療

植村 順

当然の事であるが貧しい国では食物が不足し粗悪となる、住む家が充分でなく上下水道等が無ければ住む状態は悪化し病気は増える、教育まで手が届かないかも知れないし、服も不潔であれば病気は更に増加する。新生児の死亡率は上がり平均寿命は縮まる。貧乏こそが諸悪の根元であって、命はお金で買えると言う事になる。

日本はこのお金のお陰で平均寿命は世界1の79才となったが、まだ世界の平均寿命は36才でしかない。

“日本人が一番高価だと言う命を買ってしまったが今後更にはお金を使って痴呆を買うに違いない”と或る外国の学者が言ったと聞いた事がある。しかし我が国では、今までの所、医療の名の下にお金が無駄に使われたと言う確証はない。

昔、透析は一部の研究機関と金持ちの物であった。S42年に健保適応となったが、本人のみで家族にとっては一部負担が高額のため高嶺の花であった。S47年に更生医療が承認されるに及び透析は全ての人が受けられる治療法となり、年金の制度も出来てS47年6100名であった透析患者数は急増し、H2年には遂に10万人を超え、その費用は一応の壁と考えられていた5000億円に達したと考えられる。

一方、国民一人当たり医療費はS40年1.1万円であったものが、24年後のH1年には15倍の15.7万円となり、国民所得は、この間26兆から318兆円と12倍に増加している。この経済の拡大が若し無かったら現在の日本に於ける透析治療は別なものになっていたに違いない。

今、日本の経済発展は鈍化したと言われている。悲観的な考えかもしれないが、若し此れが先の見えないトンネルに入っているのであれば、それに若し日本の国民がこれ以上の高負担に同

意して呉れなければ透析の将来はどうなるのであろうか？

曾て透析患者さんには年金制限があった。50歳だった年金制限は70歳となりやがて撤廃された。私の透析センターでは150名中85歳以上の人が通院透析中であるし、透析アミロイドーシスや其の他の合併症の為通院の見込みもないまま、入院を余儀なくされている人が7名に及び将来更に蓄積すると考えられ、後者に要する医療費は1人年間1000万円にも及ぶのである。

其れは何時の事か判らないが、経済の壁が日本人の寿命に対し、黄色の信号を送って来ることが有りはしないかと心配している。